

ムガル帝国とタージマハル

水島 司

初代皇帝バーブルと息子フマーユーン

バーブルとフマーユーン。本舞台の主役となる二人の登場人物の名は、ムガル帝国の創始者とその帝国を引き継いだ息子から借りたものである。二人は、タージマハルを生む華麗な帝国の前途とは対照的に、波乱に満ちた苦難の道を歩んだ。ここで綴られる物語の背後に横たわる歴史を、舞台の陰から覗き見ておこう。

中央アジアのフェルガナ（現ウズベキスタン）の地に生まれたバーブル（1483・1530）は、14世紀末から15世紀にかけてユーラシア大陸に大帝國を築いたティムール（1336・1405）の直系の子孫として、さらにはかつての大モンゴル帝国の覇者の流れを汲むものとして、わずか12歳で同地の太守の地位に就いた。15歳で首都サマルカンドに向かい、その地の君主となるが、しかし、わずかの月日でその地位を奪われる。これに始

まるバーブルの人生は、ティムールやジンギスカンの末裔である多くの有力者が敵対するなかで、敗北と勝利、失意と喜びのめまぐるしい繰り返しで終始していく。

サマルカンドからようやくアフガニスタンのカーブルに逃れたバーブルは、そこを拠点に故地の奪還をはかった。戦いを重ねながら、しかし、1512年、ウズベク族との戦いに最終的に敗れ、故地回復の夢は潰える。代わって野望を果たす対象となったのが、カイバル峠の南に広がるインドであった。

16世紀のはじめまでのインドは、デリー・スルタン朝と総称される5つのイスラム王朝が、13世紀の初めから交替して支配を継続していた。デリーを本拠地とする、トルコ系やアフガン系の外来の征服王朝であった。バーブルは、その最後の王朝となるロデー朝を、5回にわ



第5代皇帝シャリヤール・ジャハーン



ムムタズ・マハル

たる侵攻により、ついに1526年のパニーパットの戦いで最終的に打ち破る。続いて2年後には、西インドのラジャスタン地方の有力なヒンドゥー勢力も打ち破り、その後ムガル帝国と呼ばれるようになる一大帝国の礎を築くことに成功した。そしてその数年後に、この世を去った。

戦いに明け暮れた武人バーブルであったが、その名を現在に知らしめているのは、『バーブルの書』という回想録を残すという文人としての側面であった。その素養は、インドに下る前に身を寄せていた当時の文化的中心地であり、多くの文人・芸術家を集めていた都市ヘラット（現アフガニスタンの西部の都市）での体験にあったと言われる。学問・芸術を愛好するティムール朝文化の伝統を受け継いだものでもあった。美しい数々の細密画とともに編纂されたこの書は、アジアが世界に誇る文学の一つである。

バーブルを継ぎ、第2代皇帝の地位に就いたのが、本舞台のもう一人の主役の名となっているフマーユーン（1508・56 在位1530・40、55・56）であった。フマーユーンは、バーブルの最初の妻が産んだ4人の子の中で、唯一幼年期を生き延びた息子であった。

フマーユーンが引き継いだこのまだ生まれたばかりの帝国には、アフガンやインドのラージプート族などの敵対勢力が各地に残っていた。フマーユーンは、これらの

敵対勢力に部分的には勝利したものの、他の幾つもの戦いで敗北を喫し、デリーを追われる。それどころか、各地を転々と逃げまどう身となり、最後にはイランにまで逃げ、当時西アジアで勢力をふるっていたサファビー朝のタフマースプ王（1514・76）の庇護を受ける始末であった（1544年）。

この帝国の断絶の危機を、タフマースプ王の支援で切り抜けたフマーユーンは、再び現アフガニスタンのカンダハールからカーブルを奪取し、そこを根拠にして、インドの敵対する勢力を破った。そして、1555年、ようやくデリーを回復し、帝国断絶の危機を脱したのである。こうして復帰したフマーユーンの運命は、しかし、文字通り転がってしまふ。あつけないことに、その翌年、フマーユーンは、宮廷の図書館の石段を踏み外し、突然の死を遂げるのである。

フマーユーンの人生はここで終わる。しかし、そのインドから西アジアへの「行脚」は、結果的に、インド社会に大きな文化的影響を与えた。フマーユーンと共にペルシアから多くの文人・芸術家・画家がインドに渡来したことから、インドは、西アジアの様々な文化的要素を引き入れることができ、そこに中央アジア、西アジア、そしてインドの複数の流れを汲む豊かな文化的土壌が生まれたのである。



右からフマーユーン、父バーブル



フマーユーン廟

タージマハル

本舞台でのもう一つの重要な存在、タージマハルは、このような中央アジア、西アジア、インドの複合的な様式が見事に統合された建築物であった。高さ73メートルに及ぶドームと、日差しを美しく反射する白大理石の壁面、壁面を飾るコーランの文字、そしてその均整のとれた全体像は、まさに世界が誇る世界遺産であろう。

タージマハルが建設されたのは、第5代皇帝シャー・ジャハーン（1592・1666 在位1628・58）の時代である。本舞台では、100年前後の時間が交錯している。シャー・ジャハーンは、皇帝の地位をめぐる激しい争いを交えながら、父の第4代皇帝ジャハンギール（1569・1627 在位1605・27）の死後、第5代皇帝の地位に就いた。即位とともに、対抗馬となる弟をはじめとする多くの親族を殺戮した人物であった。そして、妻ムムタズ・マハル（1593・1631）に、まさに至上と呼ぶべき愛を注ぎ込んだ人物でもあった。

ムムタズ・マハルは、この皇帝と19年連れ添い、その間に14人の子供を産み、その最後の出産の際に死を遂げた。シャー・ジャハーンにとって、ムムタズ・マハルは計5人の妻の3番目にあつたが、この愛妃への愛は格別なものであった。記録には、「他の後の千倍を超えるもの」であったとある。各地への軍事遠征とその勝利によって帝国の版図を大きく広げた皇帝であったが、その行軍には常にムムタズ・マハルが付き添った。その死も、遠征先の出来事であった。シャー・ジャハーンは愛妃の死への悲しみの深さは、その髪の色を失わしめ、容貌を数十年も老けさせたと言え

られる。

愛妃の死を悼んだシャー・ジャハーンは、その墓廟の建設にとりかかった。壮大な工事を束ねた人物は、アフマッド・ラホリーというペルシア系インド人である。その下に、インドはもちろん、ペルシアやトルコ、さらにはヨーロッパから2万人と言われる職工が集められ、1632年から20年以上をかけて完成された。近年、インド考古局によって、その一角から、工事に携わった671名の職工達の名前が刻まれた石が発見された。ひっそりと、しかししっかりと石に名前を刻んだその行為には、世界に誇るこの建築物を残した職工達の自負がにじみ出ている。タージマハルの完成後、このような美しい建築物が二度と地上に表れないよう、シャー・ジャハーンが職工達の腕を切り落とすという逸話もある。これも、タージマハルの至上の美しさのゆえに生み出された神話である。

シャー・ジャハーンは、ヤムナ河を挟んだ対岸に、黒大理石を用いた自身の墓廟を建設しようとした。しかし、重病を患った皇帝は、タージマハル完成の数年後に、息子のアウラングゼーブ（第6代皇帝）によって、タージマハルにほど近いアグラ城に幽閉されてしまう。幽閉は、死に至る8年もの月日に及んだ。もちろん、皇帝の願いはついに叶うことはなかった。愛妃の墓廟を、アグラ城から毎日見つめた皇帝の最後の日々が、悲しみのそれだったのか、喜びのそれだったのか、知ることはできない。対岸には、黒色の小さな礎石が皇帝の亡骸であるかのようにかすかに見えている。

（2019年11月12日 カンヌにて）



タージマハル

みずしま・つかさ

南アジア近現代史専門。東京大学名誉教授
放送大学客員教授、東京外国語大学アジア・
アフリカ言語文化研究所フェロー。南アジア
学会、史学会の理事長を歴任、アジア歴史地
理情報学会事務局長。主な著書に『グローバル
経済史（放送大学教材）』『インド・から』『グ
ローバル・ヒストリー入門』、翻訳に『インド
経済史―古代から現代まで』、編著に『環境
に挑む歴史学』『アジア経済史研究入門』『現
代インド2 溶融する都市・農村』『シリーズ
激動のインド』など多数。テレビ出演に
NHK高校講座「世界史」、2018年度より、
放送大学にて『グローバル経済史』を担当。

2019 & 2020
とぜん
KOTO ZEN
Vol. 三

New National Theatre, Tokyo

タージマールの衛兵

2019 / 2020 SEASON

作―ラジブ・ジョセフ / 翻訳―小田島創志 / 演出―小川絵梨子

GUARDS AT THE TAJ
by RAJIV JOSEPH
Translated by ODASHIMA Seshi
Directed by OGAWA Eriko



新国立劇場

